
とある青髪の皆無能力（クリアースキル）

佐々草南守

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある青髪クリアスキルの皆無能力

【Nコード】

N2909T

【作者名】

佐々草南守

【あらすじ】

とある高校に所属するレベル0の青髪の少年。能力開発を受けても、欠片の能力も発現しなかったある意味珍しい無能力者だ。そんな女好きで、馬鹿でロリコンな彼の物語。始まりは一つの出会い。本来は辿るはずの無い異常な道筋の中、彼はどう成長していくのか……。科学と魔術が交差するとき——物語は始まる。

Ep.00 (前書き)

注意！

この物語の主人公『青髪ピアス』ですが、レベル5序列第六位ではないですし、パン屋に修行にいった子萌先生の家にした『誘波』さんでもありません。

完璧なオリジナルの設定ですので、それが嫌な方はなるべく見ないほうがいいと思います。

では、駄文ですがどうぞ！

その男はいたって普通であつた。

この『超能力』という、異能が一般化した最先端を越す超最先端の街、学園都市の中で、彼は普通であつた。

超能力を扱う能力者は、無能力者（レベル0）から超能力者（レベル5）まで分類され、無能力者は全体の六割、そして頂点たる超能力者はたったの七人。

無能力者といっても、それは本当に能力が無いと言うことではなく、生活の役にも立たないような使えない能力を持つものが、その判定を受けることが多い。つまり、真の意味での無能力者は、驚くほどに少ないのだ。

そして彼は、その驚くほど少ない無能力者のうちの一人であつて

「なんや、カミヤん、また女の子にフラグたてたんかいな」

「んな訳ねーだろ。上条さんにそんな出会いは少ないんだよ」

学園都市のとある高校から、学生寮に向かう道のり。二人の男が肩を並べて歩いていた。一人はツンツン頭の目立つ没个性的な顔をした少年で、もう一人は青い髪にピアスと言ったキャラ立ち、しかも身長180cm前後でその声はかなり低い少年。

そんな二人が叩きあいながら歩いている。といっても、主に叩かれているのはツンツン頭の少年で、青髪ピアスの少年は、それに反

撃される形で叩かれているだけだ。

不幸だ、とツンツン頭の少年は呟いた。それに対して「どの口で言うか!」と、青髪ピアスの少年はツンツン頭の少年の口元をつねる。

「まあ、実際女の子との出会いはありますよ? いや、アレは出会いというより『未知との遭遇』的なものでありまして……」

「なにいつてんや! それがフラグっちゅーねんぞ!」

まるで魂からの叫びだった。青髪ピアスは、大袈裟なまでに地面に膝をつき、エセ関西弁で叫ぶ。それをツンツン頭の少年は、引きつった顔で見ていた。

ツンツン頭の少年、彼の名前は上条当麻。とある高校の一年七組に所属する、ごく普通の高校生だ。ただ、学園都市の生徒であるのだから、その身に“とある”異能を持っていたとしても、それは普通に位置されるだろう。

そして、もう一人の青髪にピアスの少年。彼は上条の親友であり、悪友であり、クラスメイトである。それは彼からしても同じで、もう一人つるんでいる仲間がいるのだが、とにかく、その三人は特に仲がいい。

「まったく、カミさんはフラグ建築と同レベルで鈍感さも立派なんやから」

「訳わかんないこと言つなよ……」

「ほれ、やっぱり理解できとらんやないか」

「……………別にいいや」

大袈裟にため息を吐く上条。それを見て、青髪はニヤニヤとして
いる。しばらく、そんなくだらないことを話しながら歩いていく。

「ほな、ボクはこつちやから」

「おう、また明日な」

「じゃーな、カミヤん」

大きく手を振り合いながら二人は分かれる。別にこれから何かが
起こるわけではない。夏休み直前、終了式の放課後。明日も補修と
いう名の登校日があるから、「また明日」なのだ。

この時点では、誰も、この夏休みであんな変化があるとは思わな
かっただろう。

——否、一人だけ、その未来を知るものがいた。それは『人間』
、アレイスター・クロウリー。

誰がこの物語の主人公かは決まっている。それは最強の超能力者
？ それは違う。それは最弱の無能力者？ 確かにそうだが、最弱
は最弱でも、彼ではない最弱。

そう、この物語の主人公は上条当麻ではない。彼にはまた別の機
会で活躍して貰おう。

この物語の主人公。それは、全くの能力も発現しない一人の学生。
正史には登場するも、その全てが謎に包まれた——名前すら与え
られない少年の話。

「——はあ、はあ」

時刻は深夜。だが、周囲は暗闇に飲まれていない。それもそうだろう、ここは学園都市。夜であるうが、昼間のように明るい、科学の街なのだ。

だが、例外もある。それは、ここのような路地裏だ。大量のビルが立ち並ぶ学園都市には、路地裏もそれに比例するように入り組んでいる。

そんな路地裏を駆ける一人の少女がいた。純白のシスター服に、白銀の髪を靡かせ、路地裏を駆け巡る。時々後ろを見ながら。それは何かに警戒しているようで、不安そうな表情のまま走っている。

「はあ——はあ……」

規則的な息は、彼女にまだ余裕のある証拠である。その小さな体からは想像もつかないような速さで移動する彼女を追うのは、とても大変なことだろう。例外を除いて。

というか、ここにはその例外がたくさんいるのだ。ここは、超能力者の街。空間移動テレポートなどの空間を移動する能力ならば、場所さえわかればどうにもできるし、自分を加速させる能力などもあるかも知れないのだ。

そして今、実際に彼女は追われていた。しかしそれは、三次元から十一次元への特殊変換を行って空間を移動する超能力者ではなく

ゴウツ!!

「きゃっ！」

それは炎であった。飛翔した炎は、寸分変わらず彼女の胴体に直撃した。その衝撃は高かったようで、彼女は仰向けに倒され吹っ飛ん

だ。

「ようやく見つけたよ——」

路地裏のさらに奥から、カッソカッソと、革靴のような音を響かせながら、一人の男がやって来た。

その姿は、真っ黒な神父の服、それに反逆するかのように染められた、痛いほどの赤い髪、右目の下にはバーコードのような刺青が彫りこまれて、その口には、煙草が咥えてある。

手には炎がメラメラと揺らめく。その炎を持った手を顔まで掲げ、炎を通して倒れた彼女の方を見る。

「全く、昨晚のうちに移動していたなんてね。つついとうとしていて気が付かなかったよ」

「……貴方にはもう一人仲間がいなかったっけ？」

「彼女は野暮用でね、今は少し席をはずしているんだ」

炎の直撃した彼女は、ゆっくりと立ち上がった。不思議なことに、その体を包むシスター服には傷ひとつどころか、炎によって燃やされた部位ひとつすらなかった。

「——『歩く教会』。その装飾、その縫い方、その材料。その全てが魔術的に計算しつくされた完璧な防御術式の組み込まれた霊装。その防御力は、教会そのものと同等であるという……」

誰に知らせるわけでもなく、ただ確認するかのようにその男は呟いた。

「その通りだよ、だけど貴方は知っているでしょう？」

「こちらもその通りさ。ただ、ね。それがあれば手加減をする必要があまり無くて便利なんだ。間違ってもそれを脱いではくれないですよ」

煙草を彼女に向けて言うその男は怪しく笑った。それを聞きながらも彼女はゆっくりと、ゆっくりと後退を続ける。そして瞬間、彼女は男に背を向けて、思い切って走り出した。

「おっと、逃がしはしないよ——！！」

そういつて男は、手を前に出し、噴射する炎を繰り出した。これまた正確に彼女の背中に直撃した——が、彼女は寧ろその衝撃を利用して加速をした。直後に少し姿勢を崩してしまったが、そのままの勢いで、暗い路地を一気に駆けていった。

「……………はっ！ 夢、か」

時刻は早朝五時。ピピピと電子音を響かせる目覚まし時計を沈黙させて、青髪の少年はその場で大きく伸びをした。

「ふぁーあ、何や、最近同じような夢ばかり見てる気がするわ……………」

ぼりぼりと乱雑に頭を掻く。酷かった寝癖がさらに酷いことになってしまったが、青髪の少年は気にしなかった。まだ眠気は覚めて

いないが、朝の日課を行うために、彼は行動を開始した。

まず、よれよれで昨夜が熱帯夜であった所為で汗まみれなＴシャツを乱暴に脱ぎ捨てる。こぎれいに掃除された四畳半の部屋の隅に置いてあるカゴに放り投げた。

「お、ナイスシュートやボク。結構センスあるんとちゃうん？」

ガッツポーズを取って青髪の彼は呟いた。その後、のんびりとした動作で、これまた部屋の隅に設置された小さなプラスチック製の収納ケースから服を取り出した。それはとある高校の指定のワイシャツと赤い無地のＴシャツで、Ｔシャツを着込んだあとで適当にワイシャツを羽織る。今日から夏休みであるのだが、とある事情で今日も青髪の少年は学校に向かうのだ。収納ケースの上にある小物入れから、お気に入り（というか、それしかもっていない）のピアスを両耳につける。

「うん、これでよしと」

収納ケースの上に立ててある鏡で確認し、扉へと向かう。扉のハングーをつるせるところには、使い古されてよろよになったエプロンがつるされてある。最後の仕上げとばかりに、青髪の少年は、そのエプロンを装着して、パンパンと叩いて皺を伸ばす。

「なーんで、ここは女子の制服はあんなにかわええのに、男子の制服はエプロン一枚なんやろ？」

誰に聞くでもなく、ポツリと青髪の少年は世界三大テノールもビツクリの野太い声で呟いた。

「ま、ボクらの格好なんて、どーでもええことやけどねえ」

ガチャリと扉を開き、その学園都市では珍しい木製の廊下を歩く。ギイギイと鳴る足音は一つで、進むにつれて、その音は小さくなっていく。

曲がり角を曲がると、そこはすでに行き止まりで、これまた木製の扉がポツリとあるだけだ。

木と木が擦れて歪な音を奏でながら、ゆっくりと扉が開いた。

その先は屋上であつた。特にこれといったものの目立たない、実に地味な野外風景。どこかで見たことがあるとしたら、病院の屋上を思い出すかもしれない。こんな朝早くからでは、洗濯物も干してあるはずもなく、複数の物干し竿が我が物顔で屋上を占領していた。

青髪の少年の一日はこうして始まる。自分の下宿しているパン屋の寮の屋上で、新鮮な朝の空気と、鮮明な朝日を浴びるためにここにくるのが彼の日課になっている。

上り始めた太陽は、学園都市の特徴であり、発展の証明でもある、ビル街の影からこの屋上にたどり着いた。視界に射しこむ光を、青髪の少年は目を細め、それでも射しこむ光を手で遮る。

「むー！　ようやく目が覚めたわ！」

青髪の少年は、そういつて背筋を伸ばす。筋肉が伸び、僅かな痛みともとれる刺激が脳に伝えられる。朝の寝ぼけた頭には、そのくらい刺激が丁度良く、青髪の少年は最後に大きなあくびをして、体をひねり始めた。

「——ん？　なんやら、ボクの美少女センサーが、反応してる…。って、またカミヤンがフラグでも立てたのかな？　最近、ボク

の近くにいる女の子じゃなくて、カミちゃんの方に反応するようにな
ってしもつたしなあ……」

はあ、青髪の少年は大袈裟なため息を吐いた後に、とあることに
気が付いた。

「そついや、まだ五時やん。カミちゃんじゃ、おきてないかもなあ。
それじゃ、このセンサーに反応する美少女力はなんなんやろ……」

そついつて、青髪の少年は周囲を見回した。目を見開き、僅かな
違和感も見逃さないようにと、食い入るように周囲を見回す。周囲
を囲むビルは何時も通りの光景で、別段、異常があるようには見れ
ない。

気のせいだったのか？ 青髪の少年は、自分の誇る、他人には測
れない自分の特技が外れてしまったのかと、若干肩を落としながら、
屋上から出ようとする。

青髪の少年は、このパン屋に下宿させて貰いながら、学校に通い、
さらにはここでバイトをしている。理由は『女子の制服がメイド服
みたいでかわいいから』などといった不純なものだが、とりあえず、
青髪の少年の通うとある高校にも近いこともあり、充実した毎日を
送っているようだ。

——ガダンッ！！

「……ッ！ なんや！」

屋上に入るための木製の扉のドアノブに手をかけたその時、背後
で何かが落下した音が聞こえてきた。青髪の少年は、急に耳に届い
た音に、ビクッと、肩をすくめて振り向いた。

「なんや、女の子か……。って女の子!？」

青髪の少年は、目の前の光景に対して、一瞬だけ現実逃避をした後に、すぐ正気を取り戻した。

そう、女の子。そこには女の子がいるのだ。女好きとして、それほど有名ではないが、仲間内では知られている青髪の少年が、その女の子に対して現実逃避をするほどの女の子。

「なんやねん、この状況……。まさか、本当に空から女の子が降ってくるとは……」

若干まだ暗い青空を見上げるが、空には雲ひとつ無く、未だに星がキラキラと輝いている。不思議だ。科学の最先端である学園都市で、こんな夜空が見れるとは。はじめてみたとき、なんだか解らないが、ヒジョーッに感動した気がする。

青髪の少年は本格的に現実逃避を始めたようだ。それもそのはず、普通ではありえない状況の女の子なのだ。いくら彼が女の子が好きならリコンでも、これは容認できない。

屋上のコンクリートはところどころ輝がはしって、その中心には、物干し竿を巻き込んで倒れる、長い銀色の髪を持ち、その身を純白のシスター服で包んだ、14歳くらいの女の子がうつ伏せに倒れていたのだ。

周囲の惨劇を見れば解る。少女はとても高い位置から落ちてきたのだろう。この店の主である店長曰く、硬さをなら世界一を誇るといふ学園都市製のコンクリートを使ったものなのだ。少女の体が形を保っているほうが、青髪の少年からしたら不思議なのである。

少女が、青髪の少年の知り合いであるにゃーにゃー言うアロハシヤツの金髪のように、オートリパース肉体再生に近い能力であることを願おう。

そう思いながら、青髪の少年はそつと、少女に近づいて声をかけた。

「あー、生きてますかー？」

独特な発音、エセ関西弁で言い、少女の肩に手をかけた。するとピクリと少女は肩を動かした。

「うう……ああ……」

「！ダイジョブか？」

「お……」

少女はおおと、小さく唸り続ける。青髪の少年は、少女が生きていたことに喜ぶが、それと同時にどうしたらいいのか戸惑った。

「どないしたんや!？」

青髪の少年は、唸る少女の口元に耳を近づけた。耳元で、少女のつらそうな吐息が聞こえてくる。緊急事態だから、青髪の少年は、その吐息が気にならなかった。

「お……おな——」

「おな？」

「……おなかすいた」

「は？」

まるで、先ほどまでの呻きが嘘だったかのように、少女はロープ
―スで言った。それを聞いた青髪の少年は、ボケーっとなりながら
も、ゆっくりとした動作で、少女の耳元から離れる。

「おなかがすいたんだよ、ご飯食べさせてくれるとうれしいな！」

「ええー」

うつ伏せの状態から顔を上げて、少女は笑顔で言う。それを見た
青髪の少年は、あっけに取られると同時に、その笑顔に見ほれると
言う離れ業を同時にこなしてみせた。

とある青髪の皆無能力 クリアースキル E p . 0 0 「計画始動」 プロローグ

「はぐつもぐつ!!」

ここは世界一科学の発展した街にして、学生達の街である『学園都市』。その規模は、神奈川や埼玉にも一部が組み込み、東京都の中央三分の一を円形に占めている、とてつもない大きさの都市なのだ。

現在の時刻は六時。学生達が大半を占めるこの都市では、すでに活動が開始されている。

それは、ここ、第七学区に建つとあるパン屋でも同じだった。ただ、少しだけ、いつもと様子が違うだけで……。

「——で、これはいったいどういう状況なの？」

凜としたハスキーボイスが青髪の少年の耳に届いた。ここは、パン屋の売り場の奥にあるキッチン。ここで彼らはパンを作り出す。その中央にある、結構な大きさの机に三人はいた。一人は机にうつぶせて、ブツブツと何かを呟き、一人は一心不乱に目の前にあるパンの山を処理している。そして、それらを見下ろすように立つ高校生くらいの女性が一人。先ほどのハスキーボイスの発生源は彼女だ。仁王立ちで、その視線は、少女と青髪の少年を行き来する。

「なんていうか、あれや。この子は落下系ヒロイン……そして、食いしん坊キャラなんや」

ポツリと、青髪の少年は顔だけを上げながら言った。その言葉に彼女は、首をかしげた。

「よく言ってることが解らないけど、どうするのこれ？」

そういつて彼女は目の前の光景を指差す。それに釣られて、青髪の少年もそちらを見た。そこでは少女が、その小さな体の何処に入れているのだろうか、心配になるほどの勢いで、パンの山を胃袋に詰め込んでいく。

その手は、無常にも、青髪の少年が積み上げたパンの山を越え、立ち上がり近くにあるカゴに詰められた出来立てのパンにまで及んでいく。

「って、インデックスちゃん！ そっちは駄目や！」

「えー？ あおかみはごはんをくれるんじゃないの！？」

「もうたくさん食べたでしょうが、もうおしまいやッ！」

青髪の少年は手を伸ばしてカゴをインデックスと呼ばれた少女よりも先に取り上げる。インデックスは、取り上げられたカゴ、というかパンを名残惜しそうに見ていたが、引き際を知っているのだろう、残念そうにイスにイスに座りなおした。

「で、この子は？」

「わたしは禁書目録。インデックス よろしくね！ えっと……」

「………誘波よ」いざなみ

「そう、よろしくいざなみ！ー！」

綺麗な笑顔をインデックスは見せる。それを見て何かくねくねしている青髪の少年の襟足を誘波は無理やり引っ張って、外にでる。

「何や誘波ちゃん、もしかして……あれか、もしかするのかな？」

壁に青髪の少年を押し付けて顔を近づける誘波に、青髪の少年はビックリするほど低いが、どこか軽く感じる声（しかも顔を赤らめながら）言った。それだけで、それほど長い付き合いではないが、彼のことをよく知っている誘波は、青髪の少年が、何を考えているのか理解できた。

「何言ってるのよ teme。あんまりボケてつとその腐った脳味噌引きずり出して黒こげに焼いてあげようか？」

「おお、相変わらずの人見知りやねッ！」

右手にはメラメラと燃える青い炎を出しながら、左手で青髪の少年の側頭部をとんとんと指先で叩く。その炎をおびえた目で見ながら、青髪の少年は再び軽口を吐いた。

それに対して誘波は、頭に怒りマークを浮かべる。が、小さなため息を吐き、青髪の少年から距離をとると、その長い黒髪を掻き上げた。

「もう、いいわ。現状を説明して頂戴……」

「うん？ 現状って言っても、インデックスちゃんが落下型ヒロインってことしか、ボクは解らへんようごふんッ！！？」

ドスン。無言で誘波は青髪の少年の腹を殴る。あまりの衝撃に、青髪の少年は目を見開き、床に倒れて悶絶する。その青髪の少年を

誘波は、実に冷たい目で見つめる。

「ふう、全くテメエはほんとに懲りない男なのね……」

「——つごほつごほ。あ、相変わらず誘波チャンはツンデレさんやねえ」

そういいながら青髪の少年は壁を伝いながら立ち上がる。そんなに強く殴っただろうか？ 誘波は、少しだけ心配になったが、彼の言葉を聞いて、その気持ちは地平線の彼方に吹き飛んだ。

「安心しなさい。私はツンデレを自覚してるけど、今のところデレる予定はないわ」

「それじゃ、ボクにデレてみいへん？」

「死ねよ。テメエだけには一生デレねえわ。まずはその性癖を直してからいいなさい——で、マジであの子は何なの？」

『死ねよ』と言われた時点で、青髪の少年は膝をついていたが、その後に続いた言葉を聞いて、青髪の少年は真面目な顔をして立ち上がった。

「それがよく解らへんのよ。インデックスちゃん、マジで空から降ってきたんや。——その目、信じとらんでしょ？ なら屋上見に行ってみい」

「いいわよ面倒臭い。だったら直接彼女に聞けばいいわ」

そういつて誘波はキッチンに戻った。それについていくように青

髪少年は腹をさすりながら歩く。

「あれ？ お話はもう終わったのかな？」

おとなしく座っていたらしいインデックスが、二人を見て首をかしげた。それを見た青髪の少年は手をワナワナとさせながらニヤついていたが、すっと顔の前に出された指先から、青い炎が出たのを見て、髪の色のように顔を青くして、おとなしく肩を落とした。

「もしかして今のが超能力なのかな？」

「ん？ まあそうよ」

誘波は手を振るう。すると、青い炎は幻のように消え去った。それを見たインデックスは、何か嫌なものを思い出したのか、炎にトラウマでもあるのだろうか、ブルリと身を震わせた後、小さくため息を吐いた。

「どうしたん？」

「うん……。ちょっと嫌なこと思い出しちゃって……」

シユンとした表情をインデックスは見せた。

「少し聞きたい事があるのだけど」

「うん？ なーに？」

誘波が、インデックスの座るイスの隣に座った。青髪の少年は、ボケーっと突っ立ったままである。

インデックスの顔を覗き込むようにして、誘波は口を開いた。

「あなた、誰？」

「え？ 私はインデックス——」

「ゴメンナサイ、そういうことじゃないの。いい変えるわ——あなた、何者？」

「何者って、誘波ちゃん何いってんの？」

「デメエは黙りなさい。……おかしいわよね、こいつからはあなたが空から降ってきたなんていつてたけど、ここの回りにはこころより遥かに高いビルしかない。あなたが振ってきたのって、早朝五時くらいでしょ？ その時私、起きてたし、音が聞こえたから、多分事実だと思うんだけど。だけどさ、見たところあなた、外の人間。しかもシスターでしょ？ 何であなたは傷一つないのかしら？」

キツとした目で青髪の少年は睨まれ、竦んでしまう。インデックスは、少し困ったような顔をしたが、思い至ることがあったのか、口を開いた。

「それはこの『歩く教会』のおかげなんだよ！」

そういつてインデックスはその身を包む修道服を引っ張って、こちらに見せ付ける。誇らしげな、自慢げな顔をしたインデックスだが、二人はポカンとした表情でじっと見詰めていた。

「これの防御力は、なんと教会レベルなんだよ！ この編み方から装飾の配置、それら全てが魔術的に計算しつくされた、完璧な防御

霊装、それがこれ『歩く教会』なんだよ!!」

「でもお高いんでしょう?」

茶々を入れた青髪の少年は、目の前の誘波に睨みつけられ黙る。

「凄いだね。でもさ、たかが教会、つまりは木製とか石製の建物程度の防御力じゃ、あの学園都市最硬って言うコンクリートにぶつかって無事でいられるわけが無いよ」

「ふふん、わたしの言う教会は、そこらへんの教会じゃないんだよ！ イギリス清教の本拠地『聖ジョージ大聖堂』を守る魔術的防御術式と全く同等のものなんだ!」

イスの上に立ち、インデックスは胸を張る。

「ふーん、魔術ね……」

「あー！ その投げやりな言い方、信じてないでしょ!? 魔術はきちんとあるんだよ！ 才能の無いものでも、信仰と努力と魔力があれば、誰であってもその異能の力を操ることは出来るの!」

「インデックスちゃん！ ボクはキチンと信じとるで!」

身を乗り出して青髪の少年が自己主張するが、誘波の突き出した拳に直撃し、イスを巻き込みながら地面に倒れた。

「別に信じていないわけじゃないけど……。急にそんなことを言われても、受け入れるのには時間がかかるわよ?」

パンパンと手を払いながら、誘波はきちんと座りなおした。
インデックスは何事も無かったかのように微笑んだ。

「確かにそうかもしれないね。わたしだって、はじめてこの街に来たとき、驚いちゃったもん。魔術以外であんなことができるものがあるなんて！ って」

「あー、それ解るわ。私もそうだったもの——で、結局なんであなはここに落ちてきたの？」

「あ……」

別に忘れていたわけではない。ただ、この空間にもう少し浸っていたかったから、黙っていただけだ。だけど、聞かれたからには答えなければならぬ。

「私ね、追われてるの」

「追われてる？ 誰に？」

誘波は、穏やかな口調でインデックスに問う。

「魔術師」

「魔術師？ それは能力者のこと？」

「違うやろ誘波ちゃん。魔術師なんやから、インデックスちゃんの言ってた魔術つてのを使う『魔術師』やろ？」

「——そうね。魔術師、能力者とは違う『異能力』者……。実際

に見れば信じるしかないのだけど」

「ごめんなさい、わたし魔力が無いから魔術は使えないの」

シユンと落ち込むインデックス。先ほどから落ち込んでばかりだ。メンタル面が弱いのだろうか、そのワリにはすぐ調子を取り戻すが。

「んん？」

ゆつくりと起き上がりながら、青髪の少年は首をかしげて疑問を言語化した言葉を発する。つまりは唸り声である。

「どうしたの？」

インデックスが、唸り声を上げた青髪の少年に声をかける。完璧に立ち上がり、前髪をかき上げて、きらびやかな笑顔を浮かべてこちらに向けて親指を立てる。

「魔術の存在を証明する、ええ考えを思いついたで！」

「ほんとう！？」

「マジや！」

キャツキヤとそこら辺にいる女子高生のようにはしゃぎあう二人を、現役女子高生である誘波はどこか冷たさを感じる目で見つめる。

「……………それで、それは何なの？」

「それはな！ この『歩く教会』の強度を測ればええんやないか！

「？」

「それだよ！ さすがあおかみ！」

掌を合わせてキャツキヤする。実にテメエらは仲がいいんだな！
とかまるで他人事のように誘波は考えていた。

「——…それじゃ、誘波ちゃん、頼んだで！」

「え？」

突然、青髪の少年からかけられた声に、誘波はブーツとした思考を中断して、現実に戻した。現状を理解できず、少し慌てる。

「きいてなかったの？ わたしの『歩く教会』を、いざなみの能力で燃やしてもらいたいの」

「あ、ああ。それで強度を測るわけね……」

誘波は発火能力の能力者だ。指先からでも掌からでも、そこが体レベル
であればどこからでも発火を行える、大能力者（レベル4）相当の強度を持つエリートでもある。

掌を上に向け、青い炎を発現させる。透き通るような海の色を持つ炎は、その温度は“見えている部分”で800 ほどだ。それをインデックスに近づける。青髪の少年は、ゴクリと生唾を飲み込む。ドキドキと心臓がうるさい。

もし、この炎が彼女の体を焼き尽くしてしまったら——

ふと、近づける手の動きを止めてしまう。インデックスが、心配そうな顔で誘波の顔を見る。だが、目が合った瞬間に、インデックスは笑顔になった。

これほどの自信。確かめるまでも無い。この修道服は真正正銘、魔術の産物で、魔術は存在するのだ。確信をした誘波は、迷うことなく、掌をインデックスの腹部に押し付けた。

バイロキネシス
発火能力者である彼女にはわかった。自分の掌から発せられる熱量が、インデックスの修道服に触れた瞬間、まるで、その場に止まるように広がっていないことに。

「熱くない？」

「うん、へーきだよ」

その言葉を聞いた誘波は、そっと手を離す。『歩く教会』は、この一つ無く、そっとその表面に触れても、熱量を確認できなかった。

「ありえないわ。こんな軽くて薄い服が800の熱量に耐えられるはずが無いもの。あなたの話を信じるしかないわね」

そういつて誘波は降参するかのように両手を挙げる。それを見たインデックスは青髪の少年に向かって飛びつく。

「やったよあおかみ！」

「そつやなインデックスちゃん！ あの頭が固いことで有名な誘波ちゃんに“魔術”の存在を認めさせるなんて！」

インデックスを受け止めた青髪の少年は、その場でくるくると回る。

「ところで、魔術の証明は出来たんだし、お話の続きをしましょうか」

「つづき？」

ピヨンとインデックスは青髪の少年から飛び降りる。青髪の少年は名残惜しそうに手をワナワナさせているが、それもすぐに収まって、真面目な表情を作る。

「インデックスちゃんは魔術師に追われてるんやろ？ それはなんでなん？ それを誘波ちゃんは知りたいんやろ」

ボクもやけど。そう青髪の少年は付け足した。それを聞いたインデックスは難しい顔をする。

話してもいいのか――

これを聞けば、必ず彼らは巻き込まれるだろう。他でもないインデックスの所為で。考えて、考えて。インデックスは答えを出した。

「うん、聞いて。わたしのこと」

そついつてインデックスは語りだした。何故、自分が魔術師に追われているのかを――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2909t/>

とある青髪の皆無能力（クリアースキル）

2011年10月7日20時33分発行